

<実践報告>

教育相談におけるコラージュの試みと活用

大和 義史 長野県総合教育センター

丸山 富永 長野県総合教育センター

大和田康子 松本市立芳川小学校

A Trial and Practical Use of Collage in Educational Counseling

OHWA Yoshichika : Nagano Prefectural Comprehensive Education Center

MARUYAMA Tominaga : Nagano Prefectural Comprehensive Education Center

OHWADA Yasuko : Yoshikawa Elementary School, Matsumoto City

In the Nagano Prefectural Comprehensive Education Center, collage activity is used in counseling school non-attending children. This study examined the effectiveness of collage as a counseling activity and the feasibility of collage in a school setting. The following advantage of using collage in counseling can be made.

First of all, the relationship between the child and his teacher and classmates was improved after collage activities. Secondly, collage activities over time provided information on how the children think and feel at different. Thus, the activities help counselors monitor and adjust counseling interventions. And lastly, making collage reduced children's stress and increased their mental energy, which in turn improved their development to independence and inter-personal relationship.

【キーワード】 不登校 関係づくり 子ども理解 心の解放 自立への支援

1. はじめに

教育相談では、相談者の心を和らげ、互いに心を寄せ合うことが第一歩となる。そして、悩みや不安をまるごと受け入れ、自己を見返すきっかけをつくっていくようにかかわる。こうした関係づくりの方法として、箱庭やコラージュ（切り貼り絵）がある。

また、コラージュ療法は、箱庭療法や他の描画療法などと同じように、作品を作ること自体に自己治癒的な要素がある。更に、継続して作品を見ていくことによって、相談者の不安や悩みを理解していくことが可能であるという。

そこで、当センターにおける教育相談にコラージュを取り入れ、その有効性と活用する方法について研究し、更に、学校現場における活用の可能性を探ってみたいと考えている。

2 コラージュの概要

コラージュは、写真や絵、文字などを新聞、雑誌などから切り抜き、台紙に貼って作品にするもので、20世紀初めに生まれた美術の表現方法である。

これを個人心理療法に導入したものがコラージュ療法で、日本では1987年頃から始められた新しい心理療法である。簡単な方法で自己表現が可能で、その過程で心が癒される技法であり、「持ち運べる箱庭・ミニ箱庭」として注目されている。

(1) コラージュ療法の方法

特に定まった方法はなく、それぞれの実践家が独自の方法で行っているのが現状である。抵抗のある子どもには、同時制作法等により、安心感をもたせるように工夫する。

① マガジン・ピクチャー・コラージュ法

雑誌、新聞、広告の紙、カタログなどをあらかじめ用意しておく。写真やイラストなどで自分の好きなもの、気になるものが載っている雑誌等を何冊か持ってきてもらおうと、相談者の気持ちを理解するのに、より効果的である。台紙は、子どもの場合はB4判1枚が適当と思われるが、本人の状況や希望により、適宜選ぶ必要がある。制作時間は30分から1時間程度で、その前後の10分程度を、導入や見返しの時間に当てる。

導入は、「雑誌などから好きな写真や気になる写真を切り抜いて、好きなように貼ってください」などと伝え、年齢や状態によって工夫する。

② コラージュ・ボックス法

あらかじめ、様々な本やカタログから大小の切り抜きを用意し、持ち運びに便利な箱(コラージュ・ボックス)の中に、ばらばらに入れておく。相談者が好きと思われるものを選んで、切り抜いて集めておくのもよい。

導入では、「ここにある切り抜きを台紙に貼りつけてみてください。必要なら、はさみで切ってもよいですよ」などと伝える。

(2) コラージュ療法の効果

① 自己表現と美意識の満足

自分の内面にあるものを表現できた喜びや、バランスのとれた作品ができた時の達成感、満足感を味わうことができる。

② 心理的退行

雑誌などの中から好きなものを選び出す過程、そして、はさみで切る、手でちぎる、台紙の上に置いて位置をあこれ考える、のりで貼るなどの行為にいつの間にか熱中し、「童心に返った感じで、楽しかった」などの感想を持つことができる。

③ カタルシス(浄化作用)

自己表現をしながら解放感を味わい、「今の、自分の心の中にある様々なものが表現できた」「終わった時に、さわやかな解放感を味わった」などの感想を持つことができる。

④ 自己の内面の意識化

自分の本当の気持ちを表す場合もあるので、それを見ることによって、「自分でも気づか

ない姿を、一部でも見ることができて良かった」などの感想を持つことができる。

⑤関係づくりと理解の深まり

制作しながら、また、作品を見ながらいろいろと話し合うなかで、相談者との関係づくりが進み、理解も深まる。

(3) 作品の見方

箱庭療法や描画療法の見方や解釈を応用しているが、コラージュ療法の場合は、法則や原理は今のところ確定していない。大切な点は、継続的に制作するなかで、その流れ、変化、関連性を見て、相談者の心理的変容を把握することであり、1枚だけの作品で安易に解釈することは避けるべきである。

①統合性

作品を見た時、全体として受ける感じが大切である。例えば、にぎやかー寂しい、動的ー静的、温かいー冷たいなどの印象である。

②空間配置

紙面のどこに、どのようなものが貼られているかを見る。空間の広がりや位置・方向によって意味が異なるが、これらは一応の目安であり、絶対的なものではない。

③テーマ

表現の中に、テーマと呼べるようなものが見出されることがあり、継続した作品の中にテーマが存在する場合もある。また、作品の中に、自分自身を表現する「自己像」の切り抜きがある場合が多いが、その作品全体が「自己像」を現わしている場合もある。

④切り方、貼り方、色彩

手先の器用さや、色の好みなどとは別に、丁寧さや粗雑さなどの相談者の性格や、その時の心理状態が現れる。

3. 当センター教育相談におけるコラージュの実際

当センターで取り組んでいるコラージュは、心理療法や描画療法ではない。コラージュ療法のもつ可能性を教育相談に生かしたいという願いから、単にコラージュと呼ぶ。

(1) 不登校（中学校2年生・A子）の事例

①来所相談にいたるまでの経過

中学入学後、バスケット部で活動していたが、1年生の10月に、部活動内の人間関係につまずき、無視されるようになった。学級内に部活動の仲間が多かったこともあって教室にも行きにくくなり、約2か月間、保健室への登校が続いた。

担任や友人、家族の支えにより、1月から教室に戻り、部活動にも参加できるようになったが、2年生に進級後、友人関係のもつれから教室での居場所を失ってしまい、再び保健室への登校になってしまった。一緒に通学していた友人も離れてしまい、不安から通学できなくなり、母親が車で送迎していた。

父親と母親との意志の疎通は十分であり、父親は母親を支え、A子を温かく見守ろうと

し、母親は、A子が学校に戻れるようにと心を砕き、学級担任との連絡も密にしていた。

しかし、同居している祖父母は、A子の不登校を気にして、登校を強く勧めたり愚痴を言ったりしていた。そのため、母親は困惑し、A子は強いプレッシャーを感じていた。

②相談の経過

友達の視線を怖がり学校に行かれなくなったA子

5月 相談開始時は保健室登校であったが、「学校が恐ろしい。友達の目が怖い」と訴えて、2週間後から不登校状態に陥った。朝、何とか家はあるが、泣いていて、送ってもらった母の車から降りられないことが続いた。欠席して家にいる時は、音楽を聴いたりよく食事の手伝い等をしていたりしていた。

祖父母の視線を恐れ、家にも落ち着けないA子

6月初旬 担任、母親の働きかけに応じて、多少無理をして夜間登校を始めた。しかし心理的な葛藤は大きく、相談に来て急に黙り込んで泣き出してしまったり、「家にも、学校にも落ち着けない」と漏らしたりした。家では、祖父母や地域の人に登校をせかさされたり、学校では友達の視線を気にして、居場所の無さを感じたりしていた。そこで、登校刺激は控え、A子の落ち着く方法を探すことにした。

6月末 祖父母来所相談。A子の心の苦しみを受け止めて、登校刺激を与えることを控え、安心して家で過ごせるように配慮してもらうよう依頼した。

集団に入れずに苦しむA子

7月 夜間登校を再開したが、行ったり行かなかったりの状態であった。学年行事の登山が月末に計画されており、「みんなと登山に行きたい」と願って準備を始めたが、「学級でのいじめはなくなった。後はA子が・・・」という友達や教師の言葉に心を痛め、更に、学級担任や友達との意志の疎通が十分に取れず、「学校に行っても私の居場所がない」と不安を訴えた。不眠・腹痛等の身体症状が出たため、通院・服薬をした。

結局、登山には参加しなかった。無理をして登山に行くと、急に不安になり泣き出ししたりしたら、みんなに迷惑がかかるかと心配したらしい。「私の代わりにこの人形を連れて行って下さい」という手紙と共に、ぬいぐるみを学級担任に託したという。この様子は「身体は欠席してはいるが、心は登校している」といわれる不登校の子ども達の心の内をよく表している。

8月 夏休みに入り余裕が出てきた。同級生もたくさん参加している地域の子どもキャンプに参加して楽しむことができた。

校内に心の居場所を見つけ落ち着くA子

9月 文化祭には参加したいというA子の願いを受けて、担当者・母親のアドバイスにより、夜間登校の時間帯を早め、午後の時間登校を開始した。学校内に、音楽科準備室という安心して過ごせる場と、A子に寄り添って指導してくれるB教諭との関係をつくることによって、落ち着いて文化祭の作品の制作に取り組めるようになった。

再び時間登校を始めたA子

10月 文化祭に向けて「行きたいけれど行かない」という緊張が高まったが、風邪で1週間寝込んだ。病気ということで安心して欠席でき、家庭でゆっくりしたことで心身共に楽になったのではないだろうか、文化祭には作品展示と見学で参加することができた。

文化祭終了後、担当者とこれからどうしていきたいか話し合ったところ、「文化祭が終了して、みんなの気持ちが落ち着いたら時間登校を再開したい」と言い、10月下旬より朝8時からの午前中の時間登校を始めた。学級担任やB教諭と連絡を取り合い、A子の思いを伝え、学校での配慮点等細かく相談をした。

原学級に行かれるようになったA子

12月 B教諭が、A子の好みそうな教材を準備してくれ、午前中を音楽準備室で過ごすようになった。次第に学級への抵抗感が薄れ、少人数ならば教科の学習のグループ活動にも加わるようになった。教室での座席やA子が心を開ける友達との位置関係、教科の進捗など様子を見ながら徐々に学級復帰を図っていったところ、クリスマスの頃には学級のお楽しみ会に顔を出せるまでに回復を見せた。

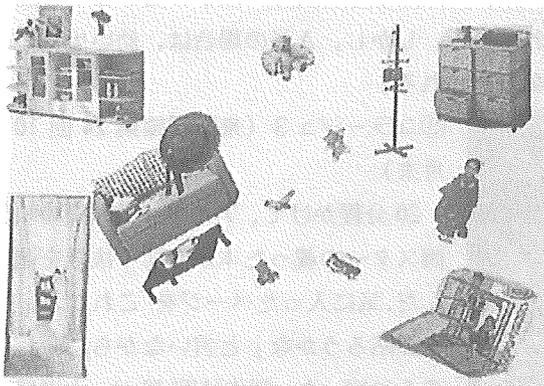
不安を整理し、学級に復帰したA子

2月 3年に進級後の修学旅行にどうしても参加したいのだが、登山のときと同じように行けなくなったらという不安が強かった。しかし、自ら登校のきっかけを作ろうと考え、自力で登校して午後の学活に参加することにした。担当者は、担任と連絡をとり、受け入れ体制を整えてもらっていたところ、3月に入ると自ら登校を再開した。この時点で相談を終了することになったが、電話で「4月からは、何もなかった顔で、朝から学校に行くつもり」と元気な声で話し、その言葉どおり、完全に学級に復帰した。

(2) コラージュに見えるA子の心の動き

言語による自己表現の苦手なA子との相談に、箱庭やコラージュを取り入れてみた。A子は非常に興味を示し、数多く取り組んだが、そのうちの代表的なコラージュを通して、A子の心の動きを追ってみたい。

①コラージュ1（来所相談4・5回目 5月）



第4回来所相談：相談室のコラージュを見て興味を示し、八つ切り画用紙を選び、ボックスの中からソファ、チェスト、テーブルを選んでレイアウトし始めた。終了の時間となったので途中で止めたが、「またやりたいので、とっておいて」と希望した。

第5回来所相談：後半になって「続きをやりたい」と取りかかった。ボックス

の中から、飾り棚、カーテン、ハンガーボール、帽子を選んで貼り始めた。相談終了の時刻になったが止められず、「持って帰りたい」と家に持ち帰った。家で貼った物は、小さな

おもちゃ、くまさん、七五三の女の子、ジャングルジムである。

第6回来所相談：家で仕上げてきたコラージュを見せて、「小さくて、かわいい人形が好き。家にもたくさんある。コラージュは好き」と話した。そして、コラージュを見ながら、A子の部屋の様子やぬいぐるみのことなどを、うれしそうに説明した。

中学生くらいの女子は、白紙の画用紙を「心の中＝室内」ととらえ、好きな物や家具を貼って心地よい自分の居場所や身の周りを作成することが多いという。

A子の「心の中＝室内」がどうなっているかをみると、歪んだりねじれたりして方向感覚が狂い、どこに視点を置いてみたらよいか悩む。紙面の両上のチェストは安定しているが、棚の上の花瓶は宙に浮いており、ソファは座るとずり落ちてしまいそうで、不安定な感じや浮遊している感じを受ける。また、3歳の七五三、A子が遊ぶとは思えない多目的ジャングルジム、くまさん、クレヨン、ぬいぐるみに、退行した幼い心の中がみえる。ソファの上に置かれた物だけが中学生らしいが、全体的にうまく整理されていない居心地の悪さを感じる。

②コラージュ2（来所相談第8回 6月末）



自発的に家で作ったコラージュを持参し、見せてくれた。「可愛かったから」と言うだけなので、「A子さんも、小さい頃こんな可愛い服を着てたのかな」「どの靴が履きたいの」などと話しかけ、コラージュを見ながら会話をした。

この作品は、まだ幼さを感じるが、貼られている子どもの年齢等から見て、コラージュ1より成長している。場面も家

の中から戸外へと発展し、心の中が少し成長したA子のエネルギーを感じる。

男の子が貼られているが、一般に思春期には、異性像として実際には手の届かない外国のスターなどが登場することが多いといわれている。しかし、A子の場合は、幼い少女の世界に住む異性という感じであり、退行現象がみられる。



③コラージュ3（来所相談第24回 10月末）

20分程かけて、アイドル・外国の映画スターの載った本から切り抜きを選んだ。気に入ったページを「これごと、全部貼ろうかな」と言いながら、楽しそうに切った。制作時間40分。大満足で、「自分の部屋の壁に飾りたい」と話した。

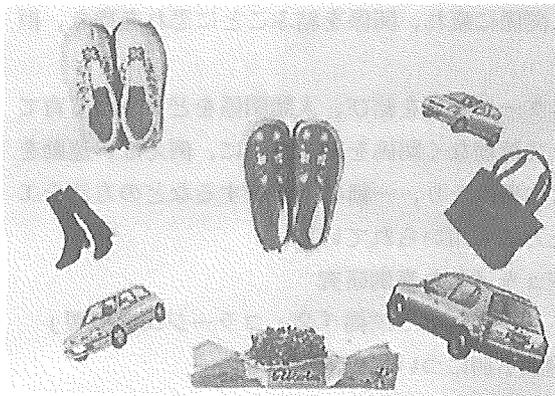
テーマは「外人さん」で、中学生の女の子が異性像として憧れる外国の少年が貼られ、コラージュ2の幼い男の子に比べて成長の跡がみえる。A子の作品は、発達のプロセス（コラージュ1：幼児期，コラージュ2：小学校低学年，コラージュ3：思春期）をよく示している。

情緒的混乱を示す不登校の場合は、一般に退行した世界から再び育ち直しをすることが課題となる。描画療法やコラージュ療法は、心の中で育ち直しを体験するのに適しているといわれる。

④コラージュ4（来所相談第28回12月上旬）

朝8時から11時30分までの登校が、1カ月間順調に続いていた時の作品である。

15分ほど何冊かの本をパラパラと見ていたが、そのうちに色のきれいな車、続けてワゴンタイプの車4台を切り抜き、可愛い刺しゅう入りの2足のスニーカーを丁寧に切り取っ



た。車とスニーカーの配置を考えて貼り、ハーブのリースと大きな赤いバックを続けて貼って完成させた。

制作しながら、「楽しいことばかりではないけれど、毎日、学校に行っている」と淡々と話してくれた。制作時間1時間。

完成してから、「ちょっと寂しいかな」と言うので「どんなところが…」と聞くと、「白いところが多いから」と答えた。

「時間があればもっと貼る？」と聞くと、

「ううん、これでできあがり」とにっこりして答えた。テーマは「お出かけ」であり、赤いバックの中にはお弁当が入っていて、自分は右下の車の中にいるという。

午前中の登校が軌道に乗り、動き始めたA子の状況や心の内をそのまま表現したコラージュのように思う。車や靴が貼られ、歩み始めようという外向きのエネルギーが感じられる。しかし、人間が貼られておらず、コラージュ3に比べて動きがなくなっている。これは、行きつ戻りつしながら歩んでいるA子の心の内を表しているように思える。

(3) 事例を振り返って

- ①A子は、自分の思いを自由に表しながら、退行やカタルシスの過程を経て、心を解放し、満足感や楽しさを味わい、エネルギーを充足していったように思われる。
- ②A子は、コラージュのなかに無意識の世界を表現している。これは、A子の心の中での育ち直しの軌跡ではないかと思われる。
- ③A子は次第に自分の内面の意識化を図ることができたのではないかと思われる。特にコラージュ4には、「歩み出そう」というA子の意志が表されているように感じる。
- ④言葉での自己表現をほとんどしないA子と、コラージュ制作を通して会話をもつことで、関係を深めたり、A子の心情を押し量りながら理解を深めたりすることができた。

4. 学校におけるコラージュの活用を旨として

当センターでは、本年度、コラージュの理論の学習とともに、実際に制作しながらその有効性を体験することを通して、子どもとの関係づくりや学校の教育相談等での活用を図ることをねらった研修講座を設定している。また、この他に「A子の相談事例とコラージュを通して不登校問題を考える」という研修内容を取り入れてみた。

これらの研修では、コラージュの有効性について理解が進み、学校でも実践してみようという受講者の意欲がうかがえた。また、本年度の教育実践センターの授業でも、同様な形で実施してみたところ、不登校の子どもの気持ちがよく理解できたなどの感想が聞かれた。そこで、その概要について説明したい。

<コラージュを通して不登校問題を考える研修・授業の実際>

(1) 当センターにおける教育相談の状況と、方法についての説明

- ・相談に来所する子どもの多くは、対人関係に疲れ、関係を結ぶことに恐れを抱き、拒否する傾向も強い。
- ・そんな子どもの心を和らげ、コミュニケーションを結び、人間関係をどうやって育てていくかに苦心する。その子に合わせて無理なく関係を結ぶために、例えば、運動と一緒に楽しんだり、森林の中に散歩に出掛けたり、一緒に工作をするなどの方法を工夫するが、箱庭やコラージュといった方法も用いられている。

(2) 不登校問題について、A子のコラージュを通じた事例研究

- ①コラージュについて概要の説明 ・資料ア：前掲「2. コラージュの概要」
- ②A子のコラージュ作品の紹介、A子の相談事例についての説明
 - ・資料イ：「4枚のA子のコラージュ写真」（但し、制作順にはなっていない）
 - ・資料ウ：前掲「(1)不登校（中学校2年生・A子）の相談事例 ②相談の経過」
- ③4枚のコラージュの並び替え
 - ・資料ウを手がかりに、A子の心の動きについて考えながら、資料イの4枚のコラージュを、A子の回復・育ち直しの過程と思われる順（実際の制作順）に並べなおしてみる。
 - ・それぞれのコラージュが、相談事例のいつ頃の作品であるかを確認し、そのときのA子の状況について補説する。
- ④不登校の子どもへの共感的理解
 - ・コラージュからうかがえる、A子の様子や心の内に思いを寄せて話し合い、不登校の子どもの心の内や苦しみを理解しあう。

(3) この事例から学ぶこと

この事例から、学校での取り組みとして学ぶことについて話し合い、確認する。

- ①担任が、意気込まず、諦めずに、かわりを持ちながら待ち続けたこと
 - ・この担任は、当初は躊躇し、十分な対応ができなかったが、母親との連絡だけは絶やさず、様々な方法を工夫して学校の様子を知らせ続けた。この関係を絶やすこと

なく働きかけようとする努力が、やがてA子が学校復帰を目指して動き始めたとき、大きな支えとなった。

- ・不登校の子が回復していく過程には、辛抱強い親の支えとともに、学校からの情報が、適切な量とタイミングで、途絶えることなく伝えられていることが欠かせない。

②柔軟な体制を組み、本人に合わせて、心の居場所づくりを工夫したこと

- ・事例では、当初できるだけ早く教室復帰をという考え方で働きかけ、結果として完全な不登校状態に追い込んでしまった。そこで、方針を転換し、かわりが持てそうな職員でチームをつくり、まず安心して生活できる人間関係づくりをどう進めるかを考え、その上で、その子のその時に合ったレベルの活動を、タイミングよく工夫していく方向で取り組んだ。
- ・心の居場所とは、単に空間や人にあるのではない。その子との関係のなか、子どもと、それにかかわる人との間で育てていく、心の交流にあるのではなかろうか。

③学級のなかで、日常的に人間関係づくりに取り組むという視点が大切であること

- ・事例では、この子の心が開かれ、外に対する関心や意欲が見られるようになるのに合わせ、級友を少人数ずつ訪れさせ、人間関係を広めるように試みた。しかし、意図したような効果は上がらず、教室に戻るまでにはかなりの時間を要した。
- ・人間関係を結ぶことに恐れを抱いている子どもの心を理解することは、教師にも友人にとっても、なかなか難しい。学級のなかで、日常的に認め合い、助け合い、励まし合うという関係を耕しておかないと、修復にはかなりの困難がともなう。こうした意味で、人間関係づくりや学級づくりを促進する、開発的カウンセリングへ積極的な取り組みが望まれる。

5. おわりに

A子の事例の他にも、いくつかの相談でコラージュを試みてきているが、それらを通して見えてきた点をもとに、学校におけるコラージュ活用の可能性についてまとめてみたい。

(1) コラージュ活用の可能性

コラージュは次のような点で取り組みやすく、学校での教育相談や保健室、情緒障害特殊学級等で、容易に実施できそうである。

- ①雑誌等のイラスト、写真、文字を利用することで、絵が苦手な人も取りかかりやすい。
- ②評価されないなので、誰でも安心して取り組める。
- ③特別な技法は必要ないので、簡単に取り組める。
- ④箱庭と同様にカタルシス効果などがあるが、特別な場所や設備・用具を必要としない。

また、子どもとの関係づくりや支援という点で、次のような効果が期待できそうである。

- ①自然に会話が成立するなど、子どもとの関係づくりに大きな効果がある。
- ②継続的に取り組むなかで、その子の心の変化をとらえながら支援の方向を探りやすい。
- ③心が解放されてエネルギーが高まったり、子どもが自分の内面を意識し始めたりするこ

とにより、自立への動きが促される。

④集団への不適応感を抱いている子どもとの関係を深め、その解消の方向を探りやすい。

(2) コラージュ実施上の課題と今後の研究の方向

研修講座参加者の声や感想には、「楽しかった」「すっきりした」などの満足感を得たという感想とは別に、次のような指摘も見られる。

- ・たいへん疲れた。途中までは嫌で嫌でたまらなかった。
- ・「思いのままに作ってみて」と言われても、どうしても構えてしまう。
- ・自分の心の内を表現するということは、とてもエネルギーがいるし、疲れる。
- ・コラージュを制作することで、自分の心の内を見られていると考えると、かなりの抵抗を感じる。
- ・学級で実施する場合、個人差がかなり大きいと思われる。どう対応していくべきか。
- ・子どもに分析して欲しいといわれたとき困ってしまう。もう少し見方がわかるようになりたいが。

こうした感じ方は、子ども達がコラージュに接したとき抱くであろう気持ちや抵抗感につながるものが多いのではないかと思われる。

こうしたことを踏まえたとき、コラージュを実施する上での問題点として、次のようなことが言えるのではないかと考えている。今後これらの点を中心に、更に実践的に研究を進め、効果的な実施方法を具体化していきたい。

- ①作品の分析や解釈のみにとらわれず、教育相談や関係づくりに結びつくコラージュの活用法を明らかにする必要がある。
- ②学級で一斉に実施するような場合、関心を示さない子ども、抵抗感を抱く子どもへの配慮をどうすべきか、事後のケアをどうすべきか等について分析し、その具体的な対応を工夫していく必要がある。
- ③子どもとの関係づくりを進めていくために、また子どもが自己理解をより深めるために、コラージュを通した意図的なかわり方が明確になれば、学校での実践化とより効果的な活用につながっていくと思われる。

[参考文献・引用文献]

- 1)長野県総合教育センター研究紀要(2000)第4号 p37,38,41~44「教育相談におけるコラージュの試み」
- 2)森谷寛之・杉浦京子・入江茂・山中康裕共著(1993)「コラージュ療法入門」創元社
- 3)杉浦京子・森谷寛之・入江茂・服部令子・近喰ふじ子共著(1992)「体験コラージュ療法」山王出版
- 4)杉浦京子著(1994)「コラージュ療法 基礎研究と実際」川島書店
- 5)森谷寛之・杉浦京子編集(1999)「現代のエスプリ コラージュ療法」至文堂, 386号, p51~p58, 「コラージュ療法におけるアセスメント」(森谷寛之)